Survey of Materials for Naniwa odori (浪花踊) : Satos' Naniwa odori (浪花踊) Banzuke (番付) from the First Performance to the Sixth Performance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40202

人間社会環境研究　第28号　2014. 9

浪花踊に関する史料調査
― 佐藤家伝来の浪花踊番付（第一回～第六回）―

人間社会環境研究科　客員研究員
笠　井　津加佐
佐　藤　　恵

要旨

本稿は，佐藤家に所蔵される浪花踊に関する史料の紹介である。北の新地浪花踊は，近代における大阪文化の精華ともいうべき芸能であった。残存史料によれば，明治15年の上演記録が初回であるが，火災や戦争による中断がある。本稿では浪花踊の番付のうち，大正４年から９年までの６回分を写真版で紹介する。なおこの史料は，所蔵者佐藤恵の祖父駒次郎が，十五年戦争末期，疎開先に携行し，現在に伝えられたものである。駒次郎は戦前，北の新地で永楽席を営み，北陽演舞場や浪花踊に貢献した人物である。

番付史料等は，今後も順次，紹介を続ける予定である。

キーワード

浪花踊，北陽演舞場，大阪北の新地

Survey of Materials for *Naniwa odori*（浪花踊）
－Satos' *Naniwa odori*（浪花踊）*Banzuke*（番付）from the First Performance to the Sixth Performance－

Guest researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
KASAI Tsukasa
SATO Megumi

Abstract

The aim of this paper is to introduce Sato's materials on *Naniwa odori*.

Kita-no-shinchi *Naniwa odori* was part of the culture of modern Osaka. It started on 15 in Meiji (1882), but there were two breaks, one caused by a fire and the other by WWⅡ.

In this paper, photo versions of *Banzuke* (番付) (from 4 in Taisho (1915) to 9 in Taisho (1920)) are presented. These materials survived as a result of Mr. Komajiro Sato (佐藤駒次郎) carrying them to his place of refuge during WWⅡ. He is Sato Megumi's grandfather and the son of Mr. Unosuke Sato (佐藤卯之助), the owner of Eirakukan (永楽館), a story-teller house (寄席) in Kita-no-shinchi. From the Taisho era to the early Showa era, Komajiro managed Eirakuseki (永楽席), a house for *geikos* (芸妓), professional female entertainers, in Kita-no-shinchi. He

contributed to *Naniwa odori* and Hokuyoenbujo (北陽演舞場), where *geikos* in Kita-no-shinchi performed *Naniwa odori* in spring.

We will continue to present them in the near future.

Keywords

Naniwa odori (浪花踊), Hokuyoenbujo (北陽演舞場), Kita-no-shinchi (Osaka)

はじめに

大阪四花街の一つである北の新地（現在の北新地）では，明治15（1882）年以降，北ノ新地歌舞練場で浪花踊を開催していた[1]。京都の祇園甲部で始まった都踊[2]に触発されたものであった[3]が，明治23年歌舞練場が焼失した[4]ため，浪花踊も中断することとなった。その後，大正４（1915）年，北陽演舞場が落成し浪花踊も復活されたが，十五年戦争の影響により，昭和12（1937）年，再び中断した[5]。北陽演舞場は，昭和20年，空襲により焼失した。浪花踊は,戦後の昭和29年再開された[6]が，演舞場は再建されず，サンケイホールや毎日ホールで上演を続けた。昭和45年，万国博覧会で四花街合同公演が行われた。昭和47以降，「大阪おどり」として公演されていたが，現在では途絶えている[7]。

本稿では，大正４年北陽演舞場の落成とともに復活した浪花踊に関して調査を行った。調査は，共同執筆者である佐藤の依頼を受けて，佐藤所蔵の史料の調査という形で笠井が進めてきた。調査過程で，浪花踊の舞台美術を手掛けた田中良氏の著作[8]から，浪花踊が花柳舞踊研究会の影響を深く受け，花柳流家元，二世花柳壽輔氏を初め多くの舞台関係者らの指導のもと，高い水準の舞台芸能であったこと[9]や，新舞踊運動といわれた当時の舞踊界の動きにも連動したものであった[10]ことなどを知るに従って，その史料を整理し記録する作業が重要であることに思い至った。さらに，第64回東洋音楽学会大会報告において，この史料の一部を紹介したところ，史料保存の意義と必要性を司会者からご教示いただいたことも，重要な動機である[11]。

従って，本稿では，浪花踊に関して概要を述べ，浪花踊に関する佐藤家伝来史料のうち，簡易版番付について，その概要を説明し，紹介することを目的とする。本稿は，佐藤が２章，佐藤と笠井が４章を共に，その他を笠井が担当した。

なお，資料引用に際しては，旧字体を当用漢字に改めるなど，表記を適宜改めた場合がある。

１．浪花踊概要

上述した「北の新地浪花踊」再開前後の大阪四花街（かがい）の状況は，『近代歌舞伎年表　大阪編』[12]から知ることができる。この年表によれば，「浪花踊」と称された踊りが二種類確認される。一つは，今回取り上げる北の新地「浪花踊」（『近代歌舞伎年表　大阪編』，初見は大正４年[13]）であり，もう一つは，新町「浪花踊」（『同』，初見は大正11年[14]）である。四花街においては，そのほか，南地五花街「蘆辺踊」（『同』，初見は明治35年[15]）その地「木花踊」（『同』，初見は大正３年[16]）が行われていた。

『近代歌舞伎年表　大阪編』の初見に関して以下の点に留意しなければならない。「北の新地浪花踊」に関しては，同書初見は大正４年であるが，残存する第二回浪花踊番付所収資料により，明治15年の番付が確認され，古い「浪花おどり」が存在していたことが確認できた[17]。新町浪花踊の同書初見は，大正11年であるが，「第十二回浪花踊」と記述されているので，年一回の公演であれば，明治44年が初回であったと考えられる。また「蘆辺踊」に関しては，同書初見は明治35年であるが，

大正６年の項に，「第三十三回蘆辺踊」と記述されており[18]，年一回の公演であったとすれば，明治18年に蘆辺踊が始まったと考えられる。以上，三点である。

『近代歌舞伎年表　大阪編』は，昭和13年分まで編纂されており，昭和13年には，四花街の踊りが公演された記録は確認されない。一方，田中良『舞台美術』[19]の記述から，北の新地浪花踊が，日中戦争の影響で，昭和12年，第23回を最後に中断していることが分かるので，「北の新地浪花踊」以外の踊りも，戦争の影響で中断していたと考えられる。

２．史料の伝来について

大阪市が大大阪と呼ばれていた大正末期から昭和の初め，北の新地も，芸者衆800人以上を抱える，日本でも有数の花街であった。それは，大大阪の経済力と活力に支えられて花開いたものであり，正に北の新地は，その粋と芸のレベルの高さで群を抜いていたと，北の新地生まれの筆者・佐藤は，幼い頃より，祖母や母より聞いて育った。

曽祖父，佐藤卯之助は大阪市北区永楽町に「永楽館」（演芸場）を営んでいた。また，祖父，佐藤駒次郎は，「北陽演舞場」そして「浪花踊」の舞台に携わり，北の新地の発展に力を注いでいたと祖母や母から聞きいてきた。

「浪花踊」について，祖父は，花柳流二代目宗家家元，花柳壽應氏や舞台美術家田中良氏など，当時の超一流の芸術家と親交を深め，心血を注いで「浪花踊」を第一級の舞台に育て上げたようである。

その芸への熱い思いから，祖父は，これから順次公開予定の史料も，戦時中は疎開先まで持参して戦火から守ったと母たちが言っていた。

公開に先立ち，同様の史料が，北の新地内に残っていないかと思い，北陽演舞場を建設した大林組や，共に浪花踊に携わってきた北の新地の古い知人などに尋ねたが，筆者・佐藤が所蔵している史料以上の分量を現在のところは見出すことができなかった。

筆者・佐藤の元にも今回紹介する番付史料のうち，愛蔵版と思われる頁数の多い番付は6回分しか残っておらず，筆者・佐藤が所蔵するものが，番付以外の史料も含めて，史料的に中途半端な分量のようにも思い，発表を躊躇う気持ちもあった。しかし，祖母や母から伝え聞いた祖父の浪花踊への熱い思いを思い出し，こうして，戦火を潜り抜けて今日まで筆者・佐藤の手元に史料が残ったことなども考え併せ，発表することとした。

３．番付

浪花踊の番付として，筆者が確認したものは二種類である。浪花踊の入場者へ配布されたと考えられる簡易版番付と，入場者が別途購入したと思われる愛蔵版番付である。

簡易版番付は，大正４年に復活した浪花踊総ての番付が佐藤家に所蔵されている。愛蔵版番付は，第２回，第６回，第８回，第13回，第15回，第18回の６回分が所蔵されている。

3.1　簡易版番付について

簡易版一冊の構成は，年代の推移とともに多少変化するが，概要は以下のとおりである。

表紙　「浪花踊」

・歌詞記述（3頁～4頁）。

・日毎の番組。第一回番付は28頁。第二回番付以降は，概ね５～８頁。
第一回番付は，曲ごとの出演者氏名を，上段に立方，下段に地方を配置した二段組みで記載。第二回目番付以降は，概ね４～５組に分けて立方，地方の出演者を，順番に三段組みで記載。

裏表紙「北新地　演舞場」（のちに「北陽演舞場」の記載）と電話番号の記載。

注，舞台衣装の説明（第三回～第八回），場面の解説（第四回～第八回）が付加される。茶席出番表の付加もしばしば見られる（第十六回以降）。なお，各種の広告が挿入される。

3.2 愛蔵版番付について

愛蔵版一冊の構成は，内容は簡易版と概ね同様であるが，浪花踊が演じられた北陽演舞場の外観写真並びに内部写真と概要，曽根崎新地並びに浪花踊の概要，舞台扮装写真並びに出演者，衣装(説明もあり)，結髪などの写真，書割などが収録されている。以下に，第二回番付を例として揚げる。

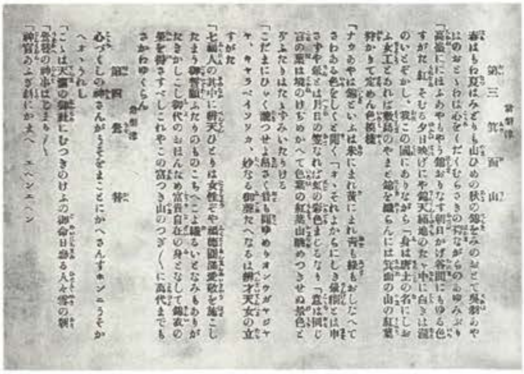
表紙　オ　「浪花踊」
　　ウ　広告
一丁　オ　薄葉に「浪花踊」 上演期間，時間，場所などの記載。
　　ウ　白
二丁　オ　北陽演舞場外観写真
　　ウ　同特等観覧席並びに本館舞台写真
三丁　オ　同貴賓待合室，特等待合室，一等待合室，二等待合室写真
　　ウ　特等茶室，酒場，一等茶室，特等一等玄関写真
四丁　オ　北陽演舞場解説
　　ウ　曽根崎新地略誌
五丁　オ　同
　　ウ　曽根崎新地の昔（大火前），曽根崎新地の今（復旧後）写真
六丁　オ　浪花踊概要
　　ウ　第一回浪花おどりの古番付写真
七丁　オ　柳亭種彦氏作第二回浪花踊の唱歌と新聞記事写真
　　ウ　浪花踊衣装写真
八丁　オ　芸妓写真（九丁表まで）
九丁　ウ　広告（十二丁裏まで）
十三丁オ　出演者写真（廿七丁裏まで）
廿八丁オ　広告（卅一丁裏まで）
卅二丁オ　歌詞（卅三丁表まで）
卅三丁ウ　浪花踊　場面解説
卅四丁オ　衣装概要
　　ウ　出演者番組（卅五丁表まで）
卅五丁オ　北新地席貸及芸妓扱店案内（卅六丁裏まで）
卅七丁オ　広告
　　ウ　奥付
裏表紙オ　広告
　　ウ　（大阪三越呉服店の広告あり）

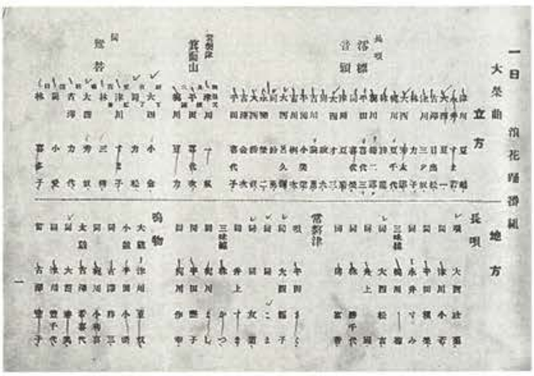
4. 番付史料

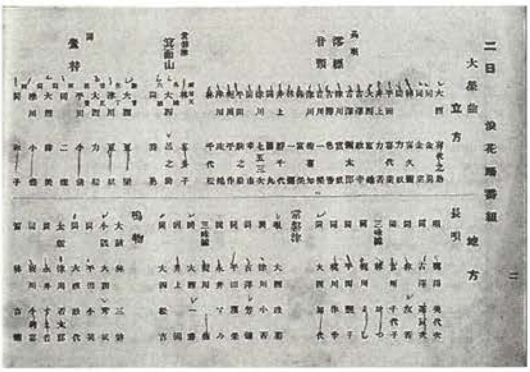
第一回浪花踊番付（12.0×18.5cm）

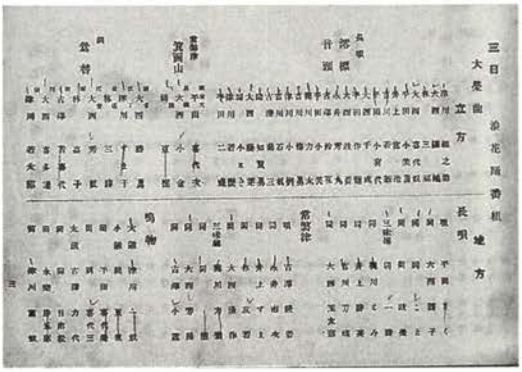
浪花踊唱歌

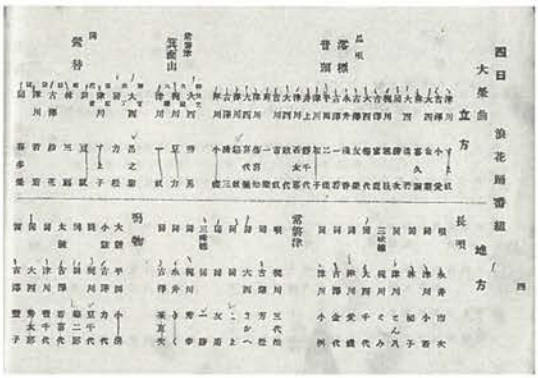
大栄曲

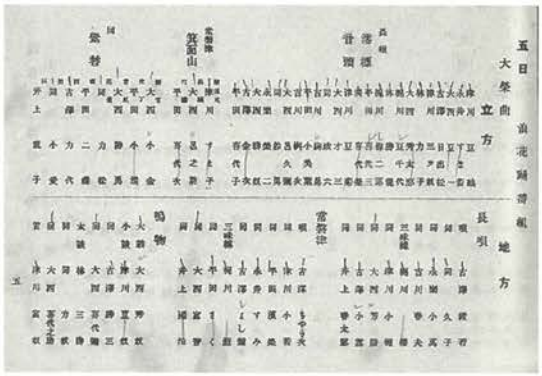


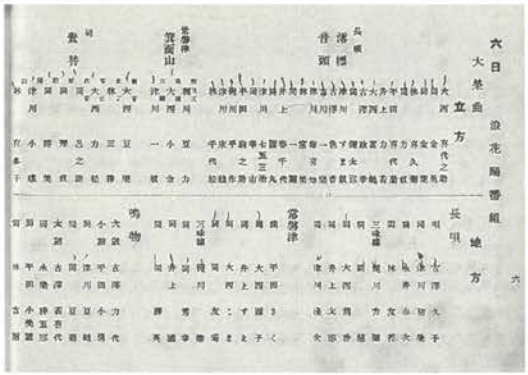

一日 大栄曲 立方 浪花踊番組 長唄 地方

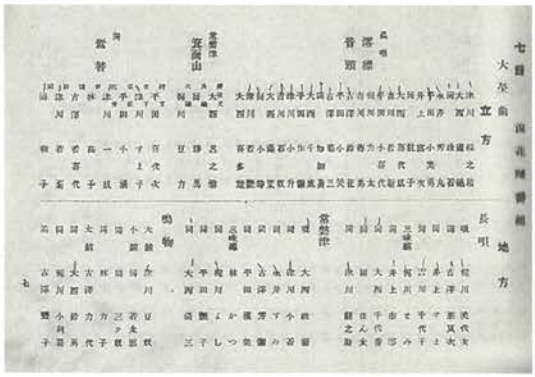

二日 大栄曲 立方 浪花踊番組 長唄 地方

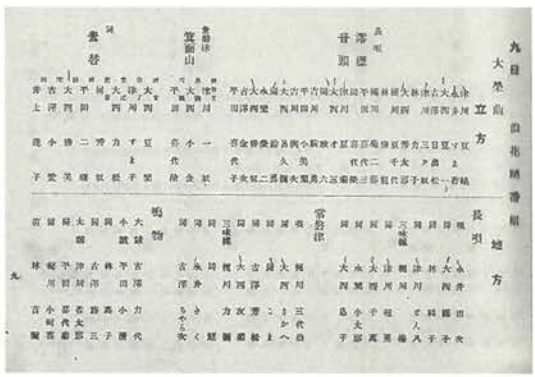

三日 大栄曲 立方 浪花踊番組 長唄 地方

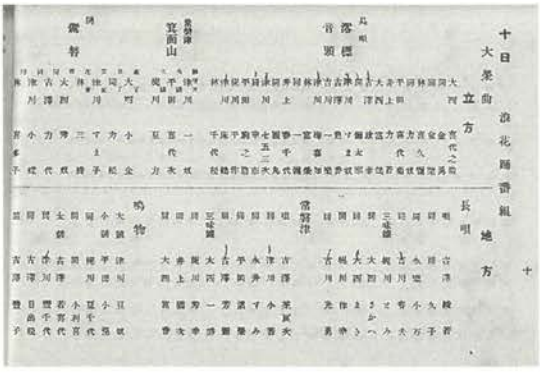


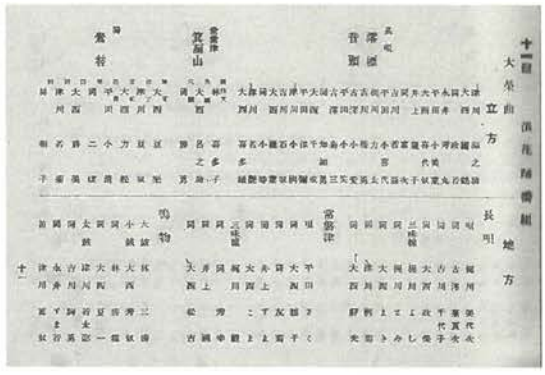


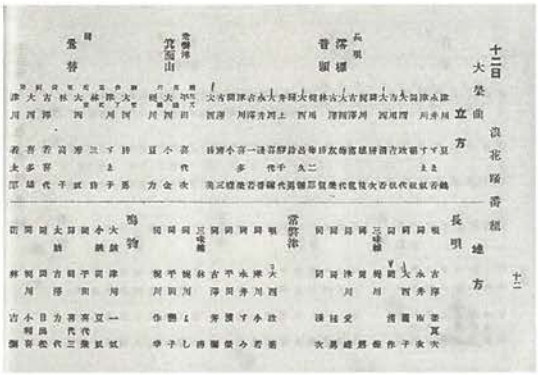


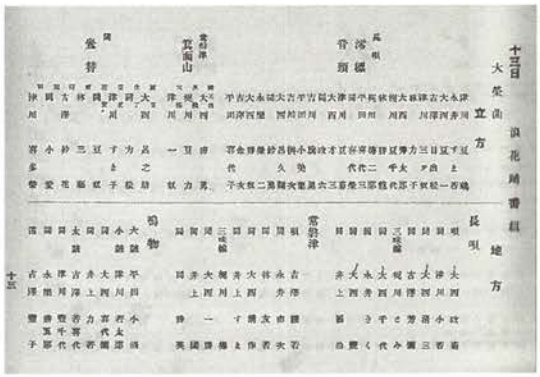






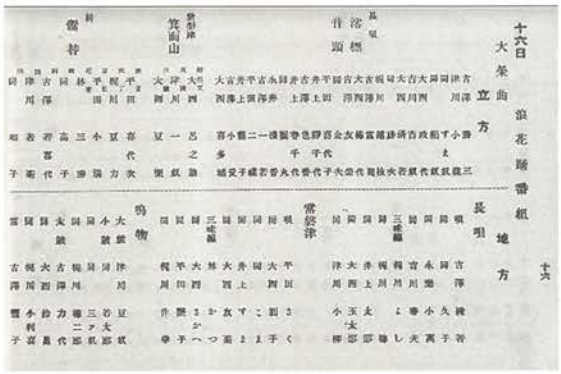



十二日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十二

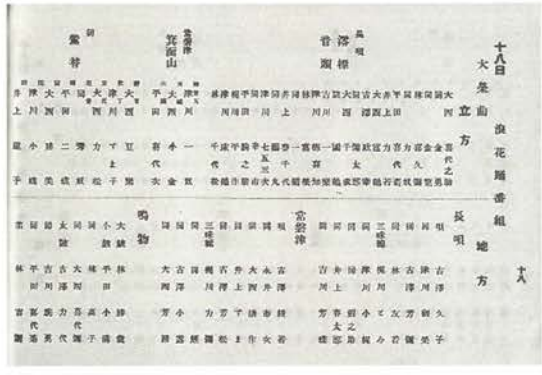

十三日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十三

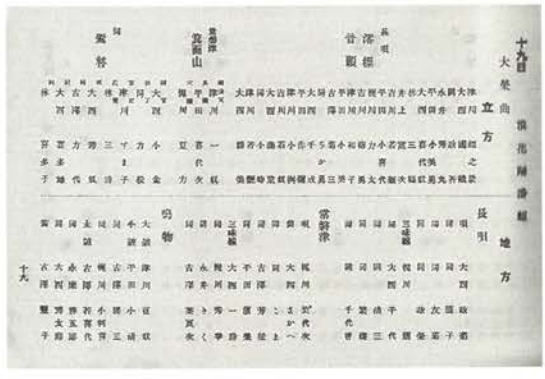
十四日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十四

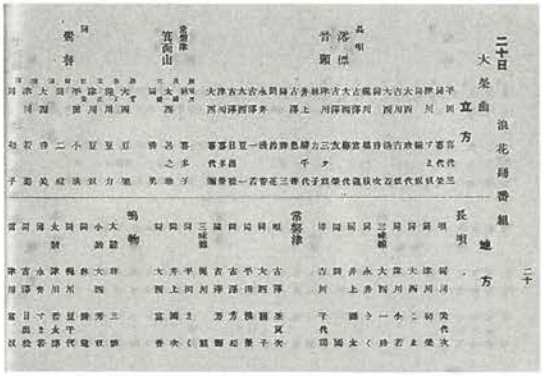
十五日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十五

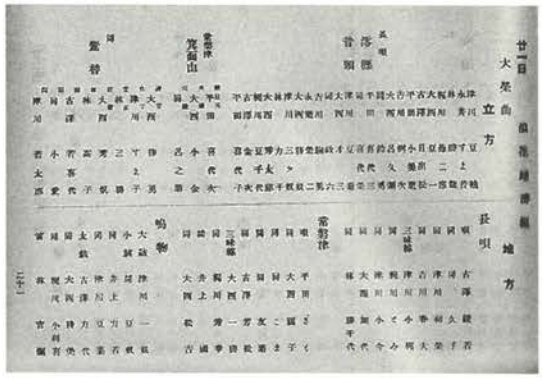

十六日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十六

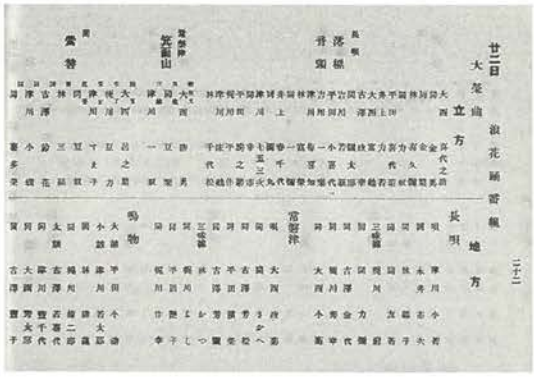
十七日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十七

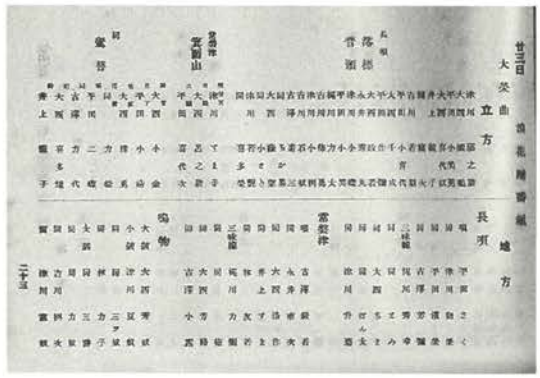

十八日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十八

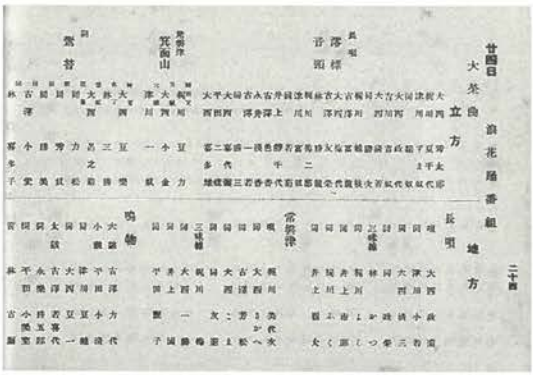

十九日
大発曲立方
浪花踊番組
長唄地方
鳴物
常磐津
筑前山
澤
音頭
同
登替
十九

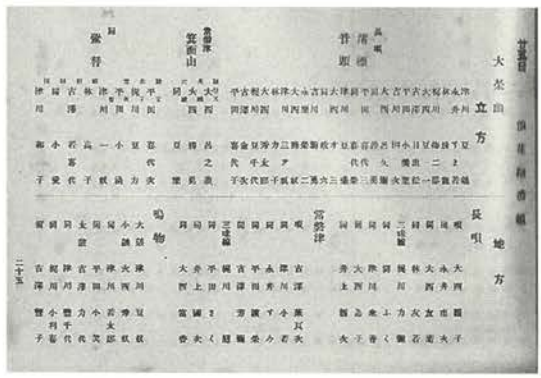


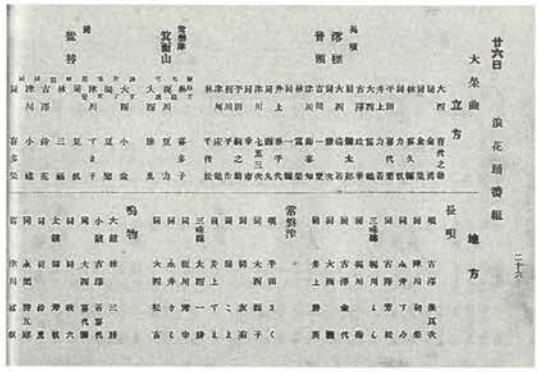


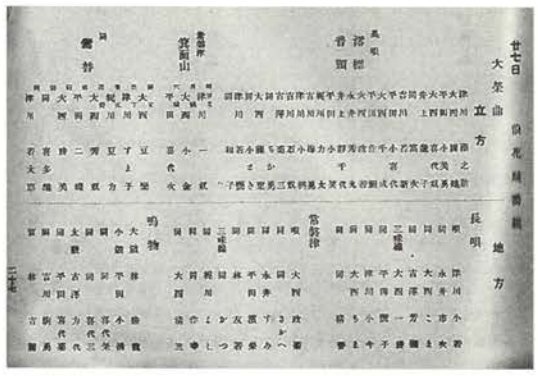


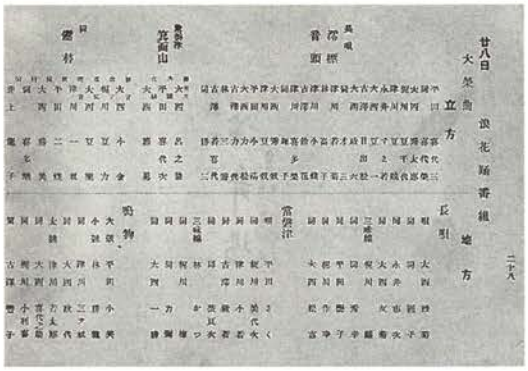


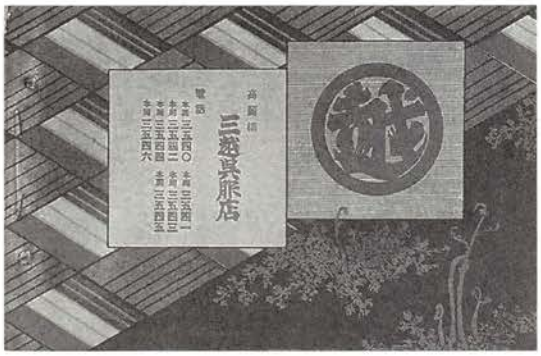




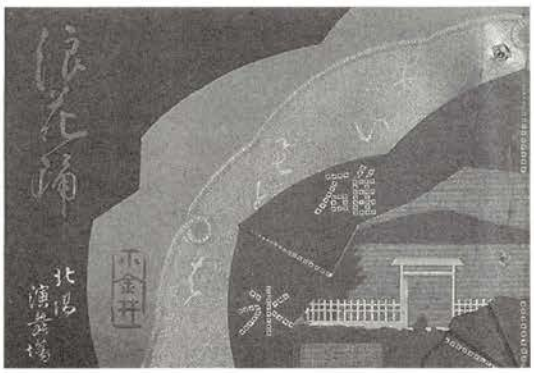








第二回浪花踊番付（10.7×15.4cm）



吉野みし人は知らねど小金井の堤に薫る花の春暮ければひかる玉川の波に網引く白雲の袍へ関田無の西ふぶき消き心の清水の寺の泉のひと流に大きな鯉をかけ盃のひらく運氣も紀陵も行末青の三拍子揃ひ榮ゆる櫻狩往き來るさの花人は枝をかざして舞ひ遊ぶ紫紺の袖のかげらふに立や濃の霞模様にかすむ月影を厭れくきょうに忍び寄るぬしは誰とも白眞弓ひく手あまたの花車廻る輪の長き夜もあけていろ好き黄金井の花の謂うらゝかに名もなつかしき戀が狂砕山おろし櫻元へぞつと吹こむ花吹雪解けてもつれて結びあふ嬉しい中をきしのぞく保谷の朝雲晴れ〳〵と、いつそ清へたい下露の花の命のいつまでも絶へぬ榮えを千代かけて萬々歳と舞納む

一

後段長唄　黒部川の冬　小金井の春

さなきだに心も遠き夜半の鐘その響もとゞかぬは戀の暗路の黒部川名さへ受たき受木橋の長き契りにからみつく藤の葛を命毛の筆に彩る雪げしき實におもしろの四方の山邊の白妙に見渡す空の霧かすみ雲どみへしは思ひの影の凝つて凍つて水晶の結や結ばん金鎖樽の絃の木の端も玉と砕けて散る花の六の匂ひのゆら〳〵と動けど切れぬ戀中は雲のかけはし霞の千鳥及びないとてほれまいものかゆかり色濃ひ藤橋の袖にも通ふ春風の恵みに解ける雪をみや　よいやな

小原ぶし

燈中たて山四十の八瀬くろべ川より海に入る
までゞ出てこす出るときや逢へす、ほんにしんきな
蜃氣樓
わしが心に忘れぬものは、きまに逢ふ夜と花と月

番組　二日、六日、十日、十四日、十八日

立方（夏）（秋）（春）
津川喜多榮、大西金男、古澤日出松、大西合玉瑯、梶川時作、大西力丸、古澤政子、平田松子、大西樣榮、林千代松、大西呂久保、大西静若、林高子、津川小蝶、大西三ツ豆、林カ子、大西君勇、佐藤金三、大西静男、津川淨市、大西静松、井上君松、大西文三、津川小ちう

（冬）大西呂之助、大西静勇、津川源調子、林喜多子、梶川富貴子、古澤力代、大西静榮、津川若羽

地方
常磐津　唄 古澤ちやら火　同 大西園子　同 大西金花　同 林友若　同 大西力松　三味線 梶川鎚　同 梶川芳伸　同 平田艶子　同 大西加滋
長唄　唄 大西さかへ　同 大西こまよ　同 大西友栄　同 梶川力女　三味線 大西豆奘　同 梶川豆力　同 大西松吉　同 大西富香　同 大西玉太郎　同 林力状
鳴物　笛 林吉閣　大鼓 大西芳讃　小鼓 古澤金奴　同 津川三ツ奴　同 大西豆一　太鼓 梶川小有育　同 平田清之助　同 津川田若

六

番組　一日、五日、九日、十三日、十七日、廿一日

立方（夏）（秋）（春）
林静叡、梶川喜二郎、平田喜代鶴、津川若菊、佐藤静市、平田花奴、平岡小石、大西政二、梶川小利喜、平田清之助、津川一豆、大西金千代、梶川梅之助、古澤金太夫、井上国太郎、大西金平、大西政六、大西静奴、吉川政奴、吉川勝男、梶川梅千代、津川七五三奴、平田若静、津川鶴香

（冬）大西小金、平田喜代次、津川豆奴、林三静、大西芳奴、古澤金洋、津川若太郎、大西呂久雛

地方
常磐津　唄 平田さく　同 大西さかへ　同 古澤芳雛　同 林静子　同 津川小雛　三味線 大西一静　同 梶川芳帝　同 津川若子　同 大西加代
長唄　唄 大西園子　同 古澤芳松　同 梶川力三郎　同 大西政榮　三味線 津川一奴　同 平田勝子　同 平田小奥男　同 平田町奴　同 井上福千代
鳴物　笛 津川富奴　大鼓 古澤力代　小鼓 梶川宜貴子　同 大西喜代之助　同 大西三ツ豆　太鼓 古澤若喜代　同 大西玲笑　同 永井鶴臨春

五

番組　四日、八日、十二日、十六日、二十日

立方（夏）（秋）（春）
津川若太郎、大西喜多雄、津川露花娘、大西喜代之助、古澤愛清、古澤ちか翁、平田作哉、大西小時、大西力翠、大西豆次、大西喜代蔵、大西国鮎、平田小笑、梶川小梅、永井喜千若、梶川豆千代、林平久奴、古澤力之助、大西静代、佐藤錦五郎、大西駒龍、梶川絹祢臣、井上力若、吉川石奴

（冬）梶川豆力、大西豆榮、大西高錢、大西若蝶、古澤若喜代、大西力松、津川宮多榮、大西金勇

地方
常磐津　唄 大西呂之助　同 古澤ちやら火　同 古澤銀若　同 大西友蕭　同 大西春代龍　三味線 津川一奴　同 古澤小宮　同 津川新孤子　同 井上静美
長唄　唄 永井市次　同 古澤芳閣　同 林力春　同 津川八束女　三味線 大西一静　同 大西小金　同 林静千代　同 大西梅若　同 大西千代晋
鳴物　笛 大西豆薫　大鼓 林静登　小鼓 平田小満　同 梶川徳二郎　同 津川七五三奴　太鼓 古澤日出松　同 佐藤玲市　同 平田若静

八

番組　三日、七日、十一日、十五日、十九日

立方（夏）（秋）（春）
大西萬歳、大西若樣、平田喜代鶴、大西喜代鶴、大西久津、大西小時、大西静雄、津川條奴、大西政代、津川七五三次、梶川平作、津川小豆、津川三ツ一、大西豆孝、林喜久平、津川富奴、大西介賀、大西芳雄、大西矢火、梶川力丸、井上国豆、平田小奘、大西豆奴、津川さくら

（冬）津川一奴、大西静龍、平田小清、津川和子、大西静美、大西喜多雄、林喜子、津川小繊

地方
常磐津　唄 古澤牧若　同 平田さく　同 永井富美　同 古澤芳松　同 大西こま　三味線 梶川豆力　同 大西豆樹　同 大西松吉　同 大西加録
長唄　唄 古澤久子　同 林静子　同 大西金花　同 林友若　三味線 梶川國　同 古澤小露　同 大西加代　同 古澤金代　同 大西清香
鳴物　笛 古澤又奴　大鼓 林三静　小鼓 津川豆奴　同 林力幸　同 平田小笑　太鼓 梶川豆千代　同 大西金千代　同 井上園大郎

七

不思議な白粉

―（驚くべき化學の進歩）―

從來どんな白粉でも其の効果は只だ附けた時に白く見せるといふだけで附けた白粉を洗つた後までも其の効果を及ぼすといふ白粉は如何に學者が頭を痛めても今まで遂に出來ませんでした、所が最近に至つて彼のエメンバー、オブ、ファマシユーチカル、ソサイチイの名譽ある稱號を有する有名な藥學者で現に日本名物クラブ洗粉本店に技師たる英人ピー、エル、スミス氏は白粉製造の技術に特別の技倆を有つて居る數名の日本技師と協力して、先年來研究に研究を重ねた結果今回新たに不思議な白粉を發明しました、夫れは附けた時に美しいばかりでなく、洗つた後の生地の色迄も自然に白く美しくなるといふ實に不思議な作用を有つた最新式のクラブ白粉とクラブ美の素白粉で、全く白粉界に一新紀元を作つたものと謂はねばなりません、今や此の最新式クラブ白粉とクラブ美の素白粉の評判は到處素晴らしいもので、最近宮内省御買上、皇后宮職御用の光榮を拜せるを始め、上中流の御婦人間では昨日まで他の白粉を使つて居た方も爭つて此の不思議なクラブ白粉やクラブ美の素白粉をお使ひになるといふ有樣で、東京大阪は勿論全國大都市に於ける其の賣行は近來實に目覺ましい盛況を呈して居ります、驚くべきは化學の進歩でございます。

御手輕化粧法

【第一に】先づ石鹸よりも牛乳よりも遙かに有効なクラブ洗粉で能くお顏やお手をお洗ひになり

【第二に】お化粧下として一番評判の好いクラブ美身ゼリーをお顏から襟元へかけて十分に塗込み、羽二重の類で能く之をお拭きになつた後

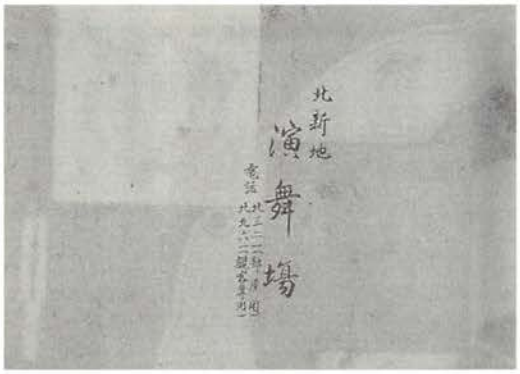
【第三に】不思議に生地の色までも白く美しくなるクラブ白粉か又はクラブ美の素白粉を鮮つて、未だ水氣のある内に牡丹刷毛で力を入れて大きく上下に刷き延ばし

【第四に】水刷毛で白粉を平均し、其の上を摘りタオルで押へて水氣を除り

【第五に】頰の類と、目の邊りへクラブ頰紅を薄く刷くのでございます、耳に頰紅を塗るのも一つの秘訣でございます

【第六に】顔には襟足を取り、頸の下から咽喉にかけては外より少し濃く白粉をお付けになりますと、御化粧が水際立つて美しく見ねます。

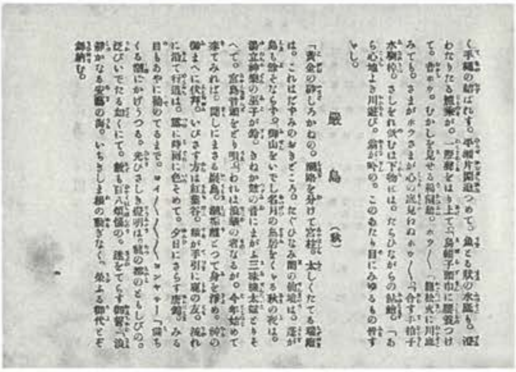
御婦人の生命たるお髮には、不思議に髮の艶を増すクラブ香油又はクラブ美髮用ポマードをお用ひになり、お髮の少い方は平生クラブキニーネ香水を振懸けてお頭の地を能くお擦りになりますと、お髮の發育が良くなる上にフケが除れて、お氣分まで清爽して參ります

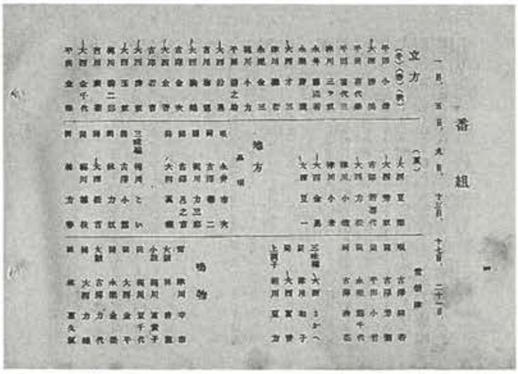


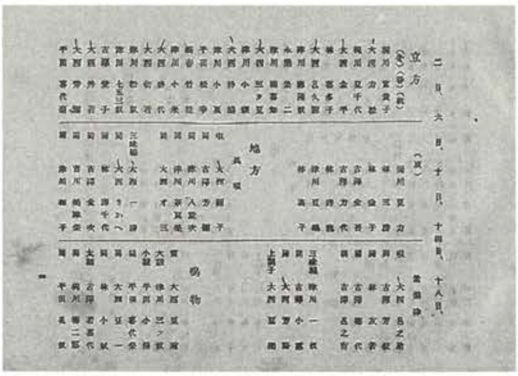
第三回浪花踊番付（12.4×18.5cm）

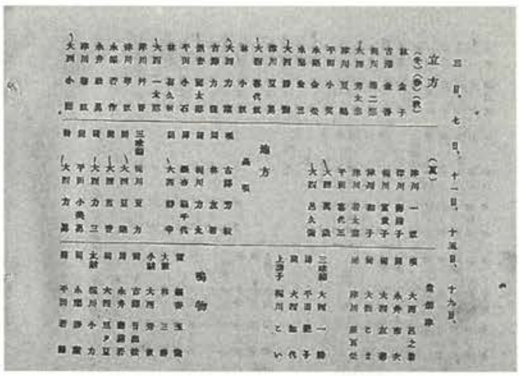
花紅葉の曲
松島

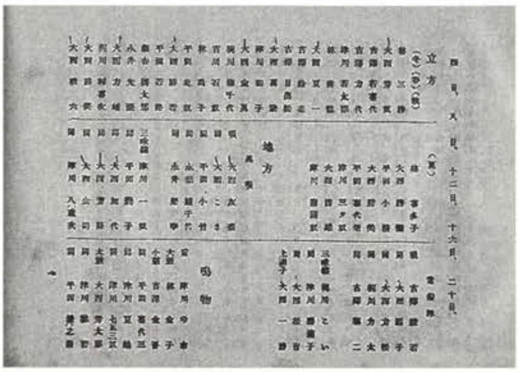
吉野
長良川


厳島

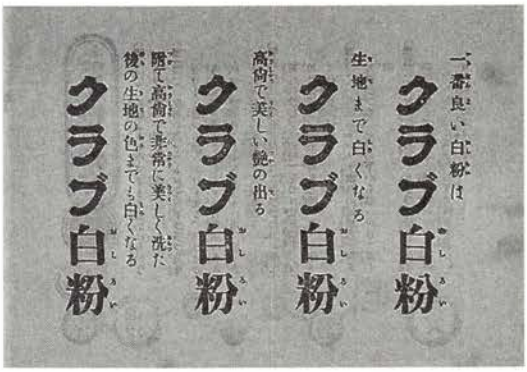

一番組



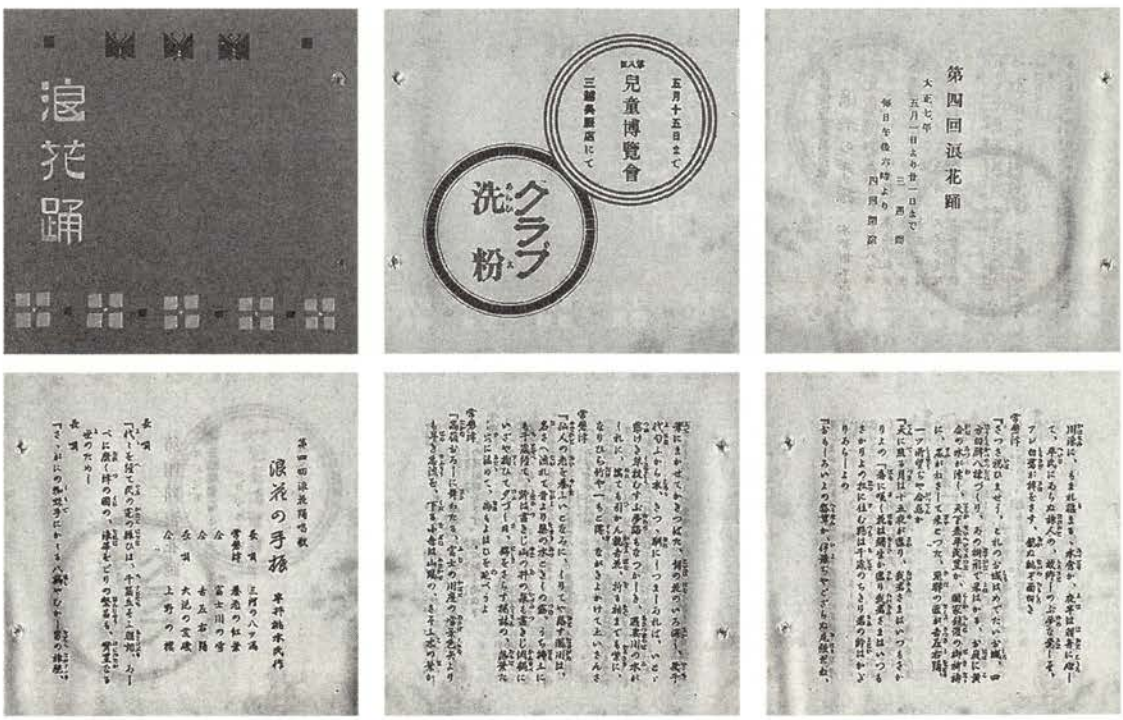




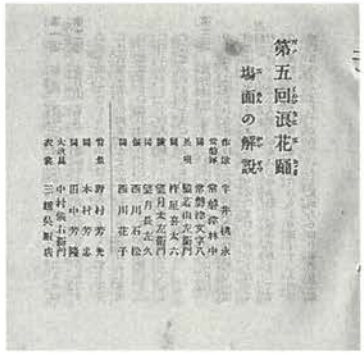
浪花踊の衣裳



第四回浪花踊番付（12.0×12.0cm）



第五回浪花踊番付（12.0×12.0cm）



北陽演舞場

クラブ
歯磨
は
みがき

クラブ
白粉

第六回浪花踊番付（12.6×18.3cm）

第六回浪花踊

大正九年
五月一日より廿一日まで
三　週　間
毎日午後六時より
四　回　開　演

第六回浪花踊番付

ふかみ草

ふかみ草
出演の解説

浪花踊の衣裳

立方
川崎音頭
長唄地方
常磐津地方

出演者番組
立方
川崎音頭
長唄地方
常磐津地方

立方
川崎音頭
長唄地方
常磐津地方

立方
川崎音頭
長唄地方
常磐津地方

北陽演舞場

立方
川崎音頭
長唄地方
常磐津地方

【注】

1) 「浪花踊の起源（略）新曲に手をつけて「浪花おどり」と命じ，初めて開演したのは実に明治十五年六月であった」日生元三郎編輯兼発行者『浪花踊』（第二回番付）発行所　北陽演舞場，大正５年，六丁表。

2) 都踊りは，明治５年に始まった。

3) 「曽根崎新地には旧くから現組合事務所の地点に，北ノ新地歌舞練場があつて，技芸の練習を奨励し，恒例として温習会を催ほして居つたが，これを京の都踊にならい，新曲に手をつけて「浪花おどり」と命じ」注1前掲書，六丁表。

4) 「同二十三年事務所が回禄の災に罹かるや同時にその建物を取毀ち，浪花踊も此処に一時中絶することになつた」注1前掲書，六丁表。

5) 「而同十二年五月偲（ママ）「面影浪花色彩」（略）同年夏遂に支那事変が起つた為め，此の公演を最後として浪花踊は休止し」田中良『舞台美術』昭和19年，西川書店，p. 103。

6) 「当組合の古くより使用致しておりました，皆様にもおなじみ深き「北新地浪花踊」の名を今回より復活使用することに致しました」北新地待合，芸妓，芸妓扱所組合『北新地浪花をどり』番付，北新地待合，芸妓，芸妓扱所組合，昭和29年，一丁表。

7) 北新地関係者によれば，浪花踊は，万博の前年，昭和44年まで続き，昭和45年から，四花街合同の大阪おどりが開催されていたとのことである。

8) 田中良『舞台美術』（前掲書），早稲田大学坪内博士記念演劇博物館『田中良氏舞台装置図集』財団法人国劇向上会，昭和５年。

9) 「市村座の関係の上に，花柳舞踊研究会との関係も加はつて吾々は又々此娯楽物たる浪花踊に対しても何等かの文化的向上への意義を付加すべきだと云ふ希望を持つて善処したくなり，次第に質的水準を高める為めの道楽気を盛り込む様になつて，研究会に於て実験済みの新舞踊形式迄盛り込むで（以下略）舞台も愈々道楽気たつぷりで相等壺にはまり，演技者の実力も永い本格的修練の結果上達して浪花文化の一翼たらむとしつつ有つたが」田中良前掲書，pp. 102－103 。

10) 「毎々述べた様に東京に於て展開した新劇，新舞踊運動は此頃に至つて，益々隆盛を極め，藤蔭会や花柳舞踊研究会の創作発表も可成り其意義と価値とを認められて，可否を論じられる声も大きくなつてゐた時なので，北陽は其振付けを花柳寿輔氏に依頼した」田中良前掲書，p. 102。

11) 笠井は，東洋音楽学会第64回大会発表（論題「芸の解釈とライフヒストリー－一舞踊家への聞き取り調査を通して－」）で，浪花踊の番付史料から写真を一部引用した。ご教示は，発表後，会場で頂いたものである。

12) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室『近代歌舞伎年表大阪篇』全八巻，八木書店　昭和61年～平成５年。

13) 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書，第五巻，平成２年，八木書店，p. 723。

14) 「第十二回　浪花踊」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書，第七巻，平成4年，八木書店，p. 43。

15) 「浪花風流　芦辺踊リ」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書，第三巻，昭和63年，八木書店，p. 673。

16) 「此花踊り」国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲

書，第五巻，平成２年，八木書店，p. 626。

17) 第二回浪花踊番付（愛蔵版），六丁裏所引。

18)「第三十三回　南地蘆辺踊」。国立劇場近代歌舞伎年表編纂室前掲書，第六巻，平成３年，八木書店，p. 149。

19) 注５参照。